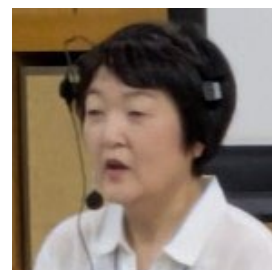




令和7年度 第7回共同機構研修会

子どもの生活の中で育まれる音楽性
～子どもになってあそんでみよう!～

講師：平井 恭子さん 京都教育大学 教授



今回の研修では、前半に、音に焦点を当てた乳幼児の発達や音に関わる保育環境のあり方、うたや音楽がなぜ必要かなど、子どもたちの発達と音に関わるお話をいただきました。また、後半は、保育現場ですぐに活用できる音楽遊びを受講者が子どもになって体験させていただきました。

子どもの耳 子どもと大人では、音の聞こえ方がずいぶん違う。大人はざわざわした中でも自分が聞きたい音だけ集中して、選択して聴けるが、子どもは周囲の音がすべて聞こえてしまう。

音の環境 園内の環境を準備する時に、どうしても目に見える部分だけに集中しがちだが、居心地のよい音の環境というものをつくることは、保育者の責務。

例えば、雨の日。 容器を置いておくと…。子どもが手にした容器に、大粒の雨が、ポツポツポツ。そばにいた先生と目と目で共感するその瞬間を映像で確認。「センス オブ ワンダー」の著者、レイチェル・カーソンも「子どもが生まれながらに持っている新鮮で豊かな好奇心をいつまでも新鮮に保ち続けるためには、一緒に感動を分かち合う大人がそばにいた必要があります。」と感性の育ちに大人の存在の重要性を説いている。

「でんしゃはうたう」 幼くして視力を失った三宮真由子さん作。リズムカルなオノマトペで豊かな音の世界を表現した絵本もおすすめ。

人はなぜ歌うの 赤ちゃんとお母さん(養育者)との間では、コミュニケーションが成立するのか?その手段は?赤ちゃんは音楽を感じているの?など、映像を見て考察してみると…。赤ちゃんと養育者の間には、コミュニカティブ・ミュージカリティー(共感的、同調的コミュニケーション)が成立しており、強い絆を感じることができる。

絆 養育者と子どもの間で声と声を重ねたり歌い合ったりすることで絆が結ばれ、やがて、声を重ねる対象が養育者から、きょうだいや、同じ園の子どもたちへと広がる。社会性の育ちと音楽的な行動は非常に関係が深い。園生活の中で、みんなで同じダンスをしたり、リズムカルに言葉を唱えたり、一緒に歌ったりする経験は、仲間の間で安心感や一体感を得ることにつながる。何度も歌っているうちに、子どもたちはより面白く歌うためにはどうしたらいいか、と音楽と遊びを一体化させていくことがしばしばあり、こうした姿は「学びに向かう姿」に通じる。

子どもたちが園生活の中で歌ったり踊ったりするのは、単に「楽しいから」だけではない。生きること、絆を築くことと歌うことは切り離せない。音楽的な活動を通じて、子どもたちに何が育っているのか、育てたいのか、捉え直してみることはとても大切なこと。

実技研修セットリスト

- ①Seven Jumps デンマークのフォークダンス
- ②七夕の神さんが ③お手玉「おじぞうさん」「ぺったらぺったん」「お時計さん」
- ④十五夜さんの餅つき(お手合わせ) ⑤ぼつつんぼつぼつ雨がふる(触れ合いあそび)
- ⑥ボールあそび ボール回し「ガボット」(ゴセック作曲)「主よ 人の望みの喜びを」(バッハ作曲)
- 「6つのエコセーズ」(ベートーヴェン作曲) 毬つき「一ゆめの一助さん」 ⑦スカーフあそび「にぎりぱっちり縦横ひよこ」「じーじー、ばあ」「シンコペーテッド・クロック」(アンダーソン)



♪アンケートより

「幼児の音楽性について新しい理解を深めることができました」「音楽を通じて、仲間意識を育てることができることを学びました」「音楽に合わせて体を動かして楽しかったです」「明日からの保育にすぐに取り入れる事ができそうだと思います」

赤ちゃんの心理学～科学的根拠に基づく子育て支援の取組～

講師 矢藤 優子さん 立命館大学教授



立命館大学で総合心理学部学部長、立命館大学大学院で人間科学研究科研究科長をやっております。実は、子どもが小さい頃は京都に住んでいて、こどもみらい館に親子で遊びに来ていました。今日は、私の研究している『乳幼児心理学/比較発達心理学』での子育て支援に関する研究の紹介とその研究から提言できることをお話させていただきます。

注：コホート研究とは、異なる年代の集団に対して長期的に追跡調査を行う研究方法。

●いばらきコホートプロジェクト

妊娠期からのコホート調査を行い、茨木市子育て支援課と連携し調査結果を共有しながら子育て支援に活かしています

- ・妊娠 14 週目が最も QOL (生活満足度) が低い。そのため早期からのサポートが必要。また、夫が家事をすることにより、QOL が高くなった。
- ・2～3歳のイヤイヤ期と呼ばれる時期のQOLも低くなっている。
- ・PHQ (鬱に関する指標) は、妊娠 14 週目が最も高い。女性が鬱になるのは男性の2倍。その内 50%の人が、産前産後に発症している。PHQには各育児時期の相関がなく、急に鬱になる可能性がある。そのため、長期的で継続的なケアが必要。
- ・パーソナリティの関連をみると、否定的感情や連想的感性の高い人は、自分の生活満足度をより低く評価する傾向がある。

子育て支援は、早い時期からのサポート、そして、長期的で継続的なケアが必要です。

●産学連携による研究成果より

様々な企業と連携し、子育て支援の研究をしています。

- ・おむつを替えの時、よく話しかけられていた子どもは、社会性が高く、話しかけなどに応答することが多かった。おもちゃで気を紛らわせず、目を合わせておむつを替えることも効果的。
- ・英語教材等を、ただ見せるだけでは、見せていない子どもと同じくらい何も覚えていなかった。教材と同じ内容を保護者が教えた場合は、たくさん言葉を覚えていた。つまり、対面でのインタラクティブなやり取りが必要。
- ・子育て支援に関するセミナーに参加した保護者は、育児ストレスが減り、子どもへの関わりが良くなった。

日常のインタラクティブな(双方向からの)やり取りが、子どもの発達を促します。日ごろの何気ない語りかけが、実はすごい早期教育になっているのです。



●アジア諸国との国際共同研究より

少子化や子育てについての諸問題はアジア全体で解決すべきではないか、と中国・韓国・東南アジア諸国へ出向き調査しています。それぞれのお国柄(文化の特徴や政策)が、どのように親子に影響しているかということ、学術的に調べると同時に、社会的にも還元しようとしています。

様々な国で調査することで、他国の育児を参考に固定観念にとらわれない子育て支援に活かします。

セミナーで保護者に伝えている内容

- ・子どもは体験から学ぶ
- ・「してほしいこと」にも環境構成を
- ・指示が通らなかったら言い換えてみる
- ・「イヤイヤ期」「魔の2歳児」と呼ばれる時期の子どもの行動は、自己意識が芽生えたという発達のしるし
- ・子どもが「なぜ？」と何度も聞くのは、世界を知るための方法が、知覚・感覚から言葉による方法に変化したため。そして子どもは、その答えを大好きな人から聞きたいのです。

子育て支援は、支援金を出すことだけではなく、子育てに関する正しい知識を提供することや、自己肯定感を高めることも重要ではないか、と思っています。『アロペアレンティング』とは、親以外の人が子どもを育てるということですが、ヒトは本来複数の養育者が共同で子育てをしてきた生き物です。子育てに不慣れな親も、祖父母や保育者・近所の人等、様々な人と共に育てていくのが本来の子育てなのです。

締切が迫っています！

保幼小連携・接続アンケート御協力をお願い (締め切り12月10日)

令和7年度も、研究事業の一環として『保幼小連携・接続のアンケート』を実施しています。入力がまだの園(所)は、是非、御協力いただきますようお願いいたします。

こちらをクリックして入力いただけます



子どもを育む喜びを感じ、親も育ち学べる取組を進めます。



[京都はぐくみ憲章]より

この印刷物が不要になれば「雑がみ」として古紙回収等へ！



発行日 令和7年12月1日
発行者 京都市子育て支援総合センターこどもみらい館
〒604-0883 中京区間之町通竹屋町下る楠町 601-1
Tel : (075)254-5001 Fax : (075)212-9909
URL : <https://www.kodomomirai.city.kyoto.lg.jp/>